

毛糸つなぐ世界・東北

毛糸や手編み作品を被災地の東北に……。横浜市で編み物教室を開くドイツ人男性の呼びかけが編み物愛好家に広がり、世界中から集まった作品が、今も被災者のもとに届いている。

横浜のドイツ人編み物講師呼びかけ

「Knit for Japan (ニット・フォー・ジャパン)」と名付けた活動を進めるのは、横浜市港北区日吉本町に住むベルン・ケストラーさん(49)。ドイツでは男子にも人気がある編み物を12歳で始めた。15年前に来日。インターネット上でデザインの仕事で働いていたが、4年ほど前に編み物教室を始めた。

2011年3月の東日本大震災発生から3週間後、ドイツの友人から送られたチョコレートとカラ



①世界一の大きさのブランケットを作ろうと呼びかけるケストラーさんの家には、鍵編みのモチーフが世界中から集まる＝横浜市港北区
②被災地に送られた靴下などの作品＝ケストラーさん提供

「寒いなかで避難生活を続ける東北の人たちに」と、帽子やマフラーを編み始めた。同年7月には友人と宮城県南三陸町の避難所に届け、編み物教室も開いた。ブログなどで支援を募ると、日本だけでなく米国、ドイツ、シンガポールなどから毛糸玉や帽子、手袋、マフラーなどが届き、避難所や仮設住宅に段ボール計45箱分

アメリカ・ドイツ シンガポール…集まった45箱分、被災地に



被災地に送られた毛糸と編み物＝ケストラーさん提供

を送ったという。

岩手県陸前高田市の仮設住宅で暮らす橋本久美子さん(60)も受け取った。娘(35)がケストラーさんと知り合いだった。橋本さんは編み物が好きだったが、津波で編み棒や本はすべて流された。「震災後、仕事もなく毎日ぼーっと過ごしていた時に紫色の帽子をもらい、本当にうれしかった」

以後、世界中の作品がケストラーさんから橋本さんに届いた。同じ仮設住宅の人たちに配ると、「寒いから助かる」と好評だった。橋本さんは、もらった毛糸でサマーセーターを編んでいるところだ。

ケストラーさんは、福島第一原発の事故を受け、風力で動く編み機の開発も進めている。新潟県十日町市で12年に開かれた「震災からの復興」がテーマの芸術祭に参加した帰りに、思いついたアイデアだという。

20ヶ四方の鍵編みの「モチーフ」を集め、つなげて世界一の大きさのブランケット作りにも挑んでいる。記録を達成したら、切り直して被災地に配る意向だ。

ギネス記録は縦25斤・横12斤。7150枚のモチーフが必要で、世界中からケストラーさん宅に集まっている。「体にまとってほしいし、仮設住宅の壁に掛けてもいい。これは私の活動ではなく、みんなの活動です」(多鹿ちなみ)

